

地域の遺伝資源に着目 隠岐の稀少植物を改良し 東京五輪会場でも披露

固有種トウテイランを
早咲きに品種改良

ツツジ研究の第一人者として国内
外での数々のプロジェクトに参画し
てきた小林教授。アルゼンチンでは
未利用の花の遺伝資源を発掘、新
品種を作って同国の花き産業を盛
り立てる一役も担ってきました。そ
んな小林教授が島根大学に赴任
後、隠岐を訪れた際に偶然目にし
たのが、日本固有種の植物、トウテ
イランでした。「青紫色の花穂が美
しく、形もきれいで思わず見とれ
ました。隠岐では随所で見かけま
したが、私には初めて見る花。調べ
ると、京都府と鳥取県の日本海
側に局所分布する稀少植物で、
環境省絶滅危惧Ⅱ類に指定され

ていました」。

隠岐諸島の分布状況を調査した
ところ、多くが海岸沿いの露岩上に
自生し、暑さや乾燥、さらに潮風に
も耐性があることが判明。花色は
青紫だけでなく、赤紫や白の変異
も発見され、色や開花時期、草姿に
も多様性があり、バラエティ豊か
に品種改良できる可能性がある
ことから、研究をスタートしました。

2016年からは東京五輪20
20の花壇植栽おもてなし事業に
参画。早咲きに品種改良した「F1
系ジャパンブルー」は翌年、夏場の過
酷な生育環境に適合する品種と
して「おもてなしセレクション」に入
賞しました。「植栽展示植物は、種
苗業者らが出展した外国原産の夏
花壇用の花がメイン。植物にも人
間にも過酷な環境で、1カ月以上
元気に咲き続ける日本原産のト
ウテイランは貴重な存在でした」
と小林教授。昨夏の大会実施時
にも、涼しげな花穂とシルバリー
フが選手や大会関係者、報道陣ら
の目を惹きました。

津田カブを育種利用し
ナバナ新品種を育成

人間の生活に役立つ多様な生物を
資源として位置付けたものを「遺伝
資源」と言います。ほとんどの動植物
や微生物が対象となり、医薬品開発
やバイオテクノロジーの発展に必要不
可欠なものです。農林生産学部の小林
伸雄教授は、地域特有の遺伝資源の
評価や育種活用に関心を入れています。



PROFILE

生物資源科学部 農林生産学科
小林 伸雄 教授
こばやし のぶお

新潟出身の私にとって、冬季は農地が雪に埋もれて
いるのが日常の風景でした。島根に赴任し、雪がないの
に閑散としている畑を見て、低温期でも栽培可能な野菜
の品種改良に挑戦。伝統野菜の津田カブの血をひく、
子供から大人がうまいと感じる新品種を育成。

花だけでなく、小林教授は地域の
伝統的な野菜の品種改良にも挑戦
しています。山陰各地に自生するハ
マダイコンの品種改良は、ヤマタノオ
ロチを彷彿させるひげ根の多い辛味
大根「出雲おろち大根」として実を
結び、2008年から販売を開始。
また、漬物で人気の松江地域の伝統
野菜「津田カブ」と花茎利用型アブ
ラナとの交配で、うまみの強いナバナ
2品種の育成にも成功しました。出
雲弁で「とてもおいしい」の意味を指
す「マゲニマイナ」「ガイニマイナ」と
名付けられた新食材は、茎の軟らか
さと甘み特徴。2018年度冬
季から試験栽培と販売をスタート、
新たな島大発の地域特産ブランド
として普及を開始しています。

現在は、小林教授らの研究グル
ープが2024年に松江市内で主催
する花木の国際シンポジウムを目指
して、専門のツツジ研究にも一層力を
入れています。「100日以上花が
散らないツツジが数系統出てきてお
り、普及活用する研究を進めたいで
す」。品種改良の魅力は、「クリエイ
ティブなところ」と強調する小林教
授。「人の暮らしに役立つ、より良い
ものを生み出していくことに、やり
がいを感じています」。



1. 東京五輪2020のマスコットガーデン(江東区有明)に植栽利用されているトウテイラン(写真提供:東京港埠頭株式会社)。
2. 個体により花の色が異なるトウテイランの花穂。3. ガイニマイナとマゲニマイナ。素材本来の味が楽しめる天ぷらやおひたし
がおすすめ。4. 松江キャンパス内には様々な品種のツツジがあり、4月下旬に見頃を迎えた。